

---

# 短編小説集

自分不器用ですから

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

短編小説集

### 【Nコード】

N3860Z

### 【作者名】

自分不器用ですから

### 【あらすじ】

その名の通り短編小説置き場です。たまに息抜きで描く程度ですがZZZ

おかしくし。

圭輔「なあ、律」

律「ん？なんだよ、遠藤」

圭輔「付き合ってくれないか？」

律「どこに？」

圭輔「そうじゃねえつつうの、俺の彼女になってくれって事」

律「な、なぐに言っちゃってんだよ、お前・・・冗談は休み休み・・・じゃないか？」

そういつて顔を赤らめながら髪をいじりだす律。黙って背中を合わせる圭輔。

律「お前みたいに音楽出来て料理出来て皆から好かれてる奴がわたしみたいに女つぽ

くもなく可愛くない奴を好きになんか・・・おかしくし・・・  
(照)

圭輔「・・・おかしくねえし。マジで可愛いけど？」

そういつて律を自分の方に向けて笑いかけながら2人の距離は本当に至近距離になる。

律「本気・・・かよ?」

圭輔「お前といたら毎日飽きないし、俺が楽しい毎日、送れる自信あるぞ」

お互いの顔と顔が至近距離のまま会話を続ける。相手の息遣いまで聞こえる距離だ。

律「お前ばつか楽しいのかよ。わたしはどうなんだ?」

圭輔「お前が笑ってないのに俺が笑うわけないだろ?俺が笑ってたらお前も笑ってる」

律「・・・後からいやだって言ってもわたしは絶対、逃がさないからな」

圭輔「上等」

そして律は自分から圭輔に身体を預けて自分を好きと言った少年を受け入れた。

律「けいすけ」

・  
・  
・  
・

圭輔「どわっ!?律、お前は学校で抱き着くなとあれほど言っただろっが」

律「いいじゃん、もう学校公認なんだし、いつでもベツタリしたいんだよ」

漣「いや、暑い、暑い。ここだけ真夏だな」

唯「漣ちゃん、今、冬だよ?」

梓「いえ、唯先輩。比喩表現で実際に夏というわけでは……」

紬「ふふっ、2人はとつても仲いいもんね」

圭輔の告白から1年後、高校二年になった2人は軽音部のメンバーも呆れるくらいに甘々なバカカップルになっていて圭輔もベツタリな律を注意はするのだが結局は受け入れてしまい、傍から見ても恥ずかしくなるような熱愛ぶりだった。

漣「確かにな。学園祭ライブで公衆の面前でキスしちゃったもんな(照)」

思い出した漣の方が恥ずかしくなったようで顔を赤くしている。

梓「2人みたいなのをバカカップルというんでしょうか」

律「バカカップルでもいいもん。いつだってラブラブだかな、わたしら」

圭輔「どうにもこの押しに弱いは、俺って……(汗)」

唯「圭ちゃん、りっちゃんに亭主関白されてそうだね」

紬「唯ちゃん、りっちゃんはこの場合、お嫁さんだから亭主関白は違うわ(汗)」

環境はあまり変わっていない。いつもの仲間がいて馬鹿をやったり、音楽をしたり、遊んだりだ。だけど律と圭輔の関係はとても親密で甘い仲に変わっている。

律「圭輔、今日も帰りに寄って行っていいよな？」

圭輔「ダメって言ってもお前は乗り込んでくるだろ、律？」

律「もちろ」

圭輔「はあ〜・・・了解」

一同「完全に尻にしかれてる」

見たまんま主導権は律で圭輔はそんな彼女に引っ張られっ放しな毎日なのである。

・  
・  
・  
・

律「おじやましま〜っす!」

圭輔「はい、どござい」

予告どおりに家にやってきた律と圭輔。いつものように彼の部屋にやってくると彼のベッドにダイブしてそのまま顔を埋めながら大きく背伸びをする。動きすぎてスカートの中が見えそうなので圭輔は顔を背けて部屋の一角にカーテンで作った着衣場所で制服を脱いでセーターにズボンを着て出ると律が手招きする。

圭輔「お前な、あんまり人の布団で暴れるな、シーツにしわがよりまく。・・・」

律「それっ!」

圭輔「うおっ!?!」

いきなり腕を両手で引かれたのでバランスを崩した圭輔はそのまま律に伸しかかる  
ような形になってそのまま律がぎゅゅと抱きしめて幸せそうな顔になる。

圭輔「いつもいきなりだな、律(汗)」

律「へへっ　いつもの事だろ?それとも抱き合っのって嫌?」

圭輔「寧ろ好きだけだな。律って抱き心地いいしさ・・・ん」

今度は律を圭輔が抱きしめる格好になり、すっぽりと腕の中に律は収まっている。

律「・・・へへっ・・・」

圭輔「あははっ……」

顔を合わせて笑い合う2人。ただただ幸せだった、この時間を共有できることが。

律「圭輔……キス」

圭輔「はいよ」

律「んんっ……んうっ……っ」

さつきよりも強く抱きしめて少し彼の肌に爪がたつくくらいにぎゅっ  
と触れ合う律。もう

盲目なまでにどっぷりと恋の麻薬に浸かってそれなしには生きてい  
けなくなっている。

圭輔「んっ……はっ……なあ、律」

律「ん？」

圭輔「髪、下ろしていいか？」

律「髪？べ、別にいいけど……変だぞ、わたしがバンド外すと」

圭輔「ずっと付き合っただけとか、もっと深く繋がったりしたけど  
まだ律が髪下ろした

ところって見た事ないなっと思ってさ、見てみたくなった」

そういつて圭輔は律が前髪をまとめているヘアバンドを外す。さら



さらな髪が下りてい  
つもと髪型が違つとかなり雰囲気が変わっていた。

律「ど、どうかな？変だろ、やっぱり」

圭輔「……………」

律「どうしたんだ、圭輔？」

ぽかんとした顔で固まっている圭輔を不安そうに見つめる律。

圭輔「（か、可愛ゆっ！？何かいつもよりさらに律が可愛い……！）  
」

やはりメンバーが言うとおり圭輔も大概にバカップルだったようだ。

律「や、やっぱりわたしは前の髪型の方が合ってるよ。こんなの……  
おかしくし（照）」

なんとなくその言葉を言った律が前の彼女と被って思出す。告白  
した時もこう言っ  
て自分の事を下に見ていて今でもこういう癖があるのだが心底、思  
うのは自分が彼女  
にどっぷりと心酔したのはこういつ時折見せる凶悪なまでの可愛さ  
なのかもしれない。

圭輔「……………おかしくね〜し。今の律、すっげえ可愛い。もっと惚  
れた」

腕の中に納まって抱き着きながら自分を上目遣いに見つめる愛おし

い人に自分の率直  
な想いを伝える。というよりどんな律も圭輔には可愛いのである  
が。

律「・・・ならば、もっと惚れた今ならいつもよりもっと問答無用  
で愛してくれる?」

圭輔「勿論。ってお前、今日は遅くなっているの?」

律「怒られてもいいさ、それより・・・きてよ、圭輔」

圭輔「・・・はいよ」

そういつて2人はまた幾度目かの親密にそして深く繋がり合った。

・  
・  
・  
・

律「けいすけ〜!起きろ〜!もう朝だぞ、朝ご飯冷めちゃうぞ〜  
!」

圭輔「・・・んっ?ああ・・・もう朝か」

なんとも懐かしい夢を見ていた圭輔が目を覚ますと目の前にいたの  
は髪をポニー

テールにして前髪を下ろした髪型にしている最愛の人、律だった。

律「早く着替えてきてよ?あ・な・た」

そういつておはよしのキスをされる。これはすでに日課だった。

圭輔「○○、おはよう」

○○「あうゝあゝ！ぱゝぱ」

あれから高校を卒業して圭輔はメジャーデビューをしていた。もちろん律や唯達と一緒に。HTTとしてなのだが律はしばらく休んでいた。というのも圭輔と律には子供が出来て産休と言う形で律抜きでしばらく活動していたのだ。

圭輔「でもまあ、これでお前もやっとバンドに復活出来るな」

律「あの、その事なんだけどね。たぶん、今年の終わりごろまた休むことになるかも」

圭輔「ん？」

律「できちゃった・・・」

圭輔「・・・へっ？」

律「出来ちゃったんだよ、2人目の赤ちゃん・・・（照）」

固まる圭輔。そして持っていた箸を落とした直後に。

圭輔「マジか、律！？い、いつから・・・というか、何か月だ！？」

律「まだ2か月・・・たぶん、前に・・・した時だと思う。あれからしてないし」

賑やかだった家庭にまた家族が増える。驚いたが2人にとって嬉しいニュースである。

律「あつ、そうだ！なんなら前に言った、あれ実現させてみるか？」

圭輔「なんだよ、前に言ったのって」

律「子供達でバンド組ませるって笑い話、本当にそれぐらい大家族にしたいな」

圭輔「……っ!?!?……ははっ！お前って本当に飽きないな、やっぱ」

そういつて律を引き寄せてすでに分かっていたように律も顔を上げて彼を受け入れる。

律「これからもがんばってよ、旦那様」

圭輔「任せるよ、しっかり支えて見せるさ、律」

頑張る以外に何かあるというのかと圭輔は想う。

こんなに好きで愛しい人が笑顔になれるならどんな事だって頑張ってみせるとそう誓う。

律「後、子供もがんばろうね」

圭輔「うっ……善処します……」

やっぱり律には引つ張られっ放しで今も変わらない圭輔。だがあの

頃から変わらない

事、それはやっぱり彼女といれば未来永劫、幸せしかない。

これからも律と圭輔は共に笑い、共に泣いて2人でずっと支え合い、生きていく。

永久の愛を誓い合って。

マミさんのために色々と介入させてみた。

マミ「テイロ・ファイナーレ！」

巨大な大砲からお菓子の魔女・シャルロットが目がけて砲撃が炸裂し、倒したかに見え

たがその口から巨大なピエロの顔をした芋虫が吐き出されて銃を撃ちきったマミの目

の前に現れて完全に虚を突かれたマミは動けない。

マミ「……っ!」

さやか・まどか「……はっ!?!」

そして鋭い牙でマミの頭を噛み砕こうと口を開けて喰らおうとするのだが……。

?????「……お前、食うのか?」

目の前にはオレンジ色をした円形な身体に後頭部?的な部分がギザギザと鋭利に

突き出ているその身体自体に顔のある正体不明な生物だった。

しかもまど マギの佐倉 杏子のコスプレをしているという変態ぶりである。

首領パッチ「わたしは巴 マミの一番弟子、佐倉 パチ子!やるならま……」

シャルロツテ「バクッ！」

首領パツチ「ぎゃああああああああああ！！！！？」

言う前に食われた首領パツチは全身から血を出しながら爽やかにマ  
ミに言う。

首領パツチ「食つかい？」

マミ「食わないわよ！？つつか、あなた尋常じゃない状態でしょ、  
死ぬわよ、それ！？」

杏子「つつか、わたしの台詞ばくんじゃねえええ！！！！」

何故か、まだ登場しないはずの杏子ご本人が真上から槍で首領パツ  
チだけ突き刺す。

首領パツチ「てめえ、攻撃対象間違ってたろうか？！俺は味方だ  
！！！！」

????「首領パツチ、助けに来てやつたぞ！！！！」

さらにいきなり現れた金色アフロの長身の男が首領パツチごとシャ  
ルロツテをぶん  
殴って揃って地面を転がす。

ポーポボ「魔法少女ポーポボ、月に替わってお仕置よおー！！！！  
！！！！」

そして何故か、かなり前のセーラーオーンの服という変態スタイルで現れた。

さやか「出てくんない、この変態!!!?」

今度はスマ○ラ名物・ホームランバットのフルスイングでポーボボをさやかが高々と

ホームランしたのだがその先には思わぬ軍団が待ち構えていた。

吹雪「いくよ、豪炎寺くん!」

豪炎寺「おう!」

何と現れたのはイナズマイレブンの豪炎寺&吹雪で炎をまとった豪炎寺と氷をまとつ

た吹雪が互いに正面から交差するようにしてすれ違い、同時に回り蹴りを繰り出して

ポール基ポーボボをシュートする合体技を炸裂させる。

豪炎寺&吹雪「クロス!ファイア!!!」

強烈なシュートで蹴り飛ばされたポーボボが何故か顔だけ出した状態の焰と氷を纏つ

た球体の状態で突撃するがどう考えてもGガンダムのアノ技だった。

ポーボボ「真説・鼻毛真拳超奥義ポーボボハジケ玉!!!」

マミ「いや、それGガンダムの超級霸王電影弾でしょうが!?!」

まどか「というよりなんでマミさんがそついうの知ってるんです!





何故かいきなり出されたところ天の助だったのだがまるで状況が読めていない。

首領パッチ「トコロテンノカベ・天の助仕様!!」

そしてもろにポーボボの顔が先頭に出ているポーボボから熱いベ―ゼ攻撃をくらう。

ポーボボ・天の助「ぎゃあああああああああああああああ!!!!」

まどか・マミ「両方、ダメージくらうんかい!?!」

さやか「ついにまどかのキャラまで崩壊してる・・・」

ほむら「まどかあああああああああああ!!!!」

そついつつまどかを押し倒して襲っている変態バージョン・ほむら。

杏子「いきなり出てくるんじゃないやねえ!! つつか、てめえも変態ネタの方でくんない!」

シャルロツテ（今のうちにマミを）

などとしている間に油断していたマミをもう一度、マミらせるために牙で襲い掛る。

円堂「止める!」

握り拳にエネルギーが収束してそれを気合諸共前方に突き出した。

円堂「真・ゴッドハンド！」

シャルロツテ（こいつらだけ真面目で倒せない……！）

というより円堂達は本気で彼女を助けにきたので当たり前である。

ポーボ達について

ては何故か迷い込んでしまい、成り行きで乱入したようなものだ。  
ボケ要員のな意味で。

ポーボ「ならば俺からのラストパスを受け取れ、豪炎寺、吹雪！  
……！」

そして何故か、目の前に用意される天の助と首領パッチ。

天の助・首領パッチ「え？」

ポーボ「真説・鼻毛真拳超奥義……」

さらに何故か用意される左右上下に圧縮プレス機をついた専用機械  
に立つ首領パッチ達。

ポーボ「圧縮！圧縮！馬鹿を圧縮！圧縮！圧縮！圧縮！いら  
ない子を圧縮……！」

天の助・首領パッチ「ぎゃあああああ……？？？ゴフアツ！？  
ゲフオツ！？」

まどか「いともたやすくえげつない行為が行われたああ……！」

ポーポボ「そしてロベカル式フリーキック拳！！！！！！」

あの物理学者達が研究対象にしたロベカルばりのフリーキックで豪炎寺達にパスを送る。

豪炎寺「ファイアー！！トルネード！！」

吹雪「吹き荒れる！エターナル・・・！ブリザード！！」

蒼紅の螺旋を描いてシャルロットに直撃してマミる前に阻止した。そして始まる武力介入。

家康「天道突き！！」

政宗「magnum step！！」

雪村「千両花火！！」

突如現れたのは戦国BASARAの徳川 家康、伊達 政宗、真田 雪村。見るとほ

むらもいて時間跳躍を使って戦国時代からとんでもないのを連れてきたらしい。

さやか「もうおぶだけは終わりよ！ほむら、徹底的にやっちゃいなさいー！」

ほむら「勿論よ、報酬にあった働きはするわ」

まどか「なんでほむらちゃんがさやかちゃんのいう事聞いているの・・・

・?  
「

さやか「報酬よ、まどかの幼少時代の写真とかその他諸々で買収したのよ」

まどか「何、勝手に人の写真で手懐けてるの!?!」

さやか「何でもアリよ、祭りじゃ、祭りじゃあああ!?!」

杏子「お前もキャラ崩壊してっぞ!」

マミ「あの・・・メインのわたしが忘れられてるんですけど・・・」  
「

そんな中、何故か携帯電話をかけ始めるまどか。

マミ「鹿目さん? 一体、何をしてるの、こんな時に」

まどか「はい、わたしの親戚のお姉さんと友達の人と一緒に呼んでもらいました」

マミ「お友達って・・・一体、誰を」  
「

刹那、空間を突き破って桃色の巨大な閃光が飛来してきてその着弾に巻き込まれて

マミがふつとんで感じ的にorzな恰好で地面に転がる。

ポーポポ「あつ、白の熊マーク」

幸村「ぶふっ!?!」

幸村には刺激が強かったのか鼻血をふいてその場に崩れ落ちてしま  
い、恥辱からか  
枷が外れたマミの能力がまた元に戻り、マスキット銃をばら撒いて  
ポーポポを睨む。

マミ「お前らはわたしを助けに来たんじゃないのかあああああー  
ー！ー！！！？」

．．．．．（>皿<\*（<見せられないよ！．．．．．

ポーポポ「ふっ、その程度で俺は倒せんぞ」

そういつつ全身出血多量でタンカに乗せられているポーポポ。

政宗「ってほとんど瀕死の重傷じゃねえか！！」

ポーポポ「あ．．後は頼んだぜ．．．」

そうして救急車で運ばれていくポーポポ。しかし、何故、救急車が  
などツツコンではいけない。

マミ「こうなりや、わたしが八チの巢にしてやるわよ！かかってき  
なさい！」

シャルロツテ（何だか、わけわからなくなった．．．orz）

そしてそんなこんなで助けにかけつけたのは過剰火力組だった。



ほむら「なんなの、その仕様!？」

パイルドラモン「そして俺達も登場!」

ほむら「何、ナチュラルに登場してるのよ!？」

ポケ役の変態ほむらがツッコミ役という立場逆転の状況になっていた。

天の助「これは・・・あれだな」

首領パッチ「俺達・・・被害受けるパターンだな」

そしてすでに自分達の命運を悟った2人は何故か、聖人のような目をしていただった。

カムイ「変身!」　リイン!フォルトナ!エムギア!

リ・フォ・ルム!リフォルム!リ・

フォ・ルム!

本編で出たばかりの新フォーム・リフォルムフォームになったカムイ版オーズ。

なのは「レイジングハート、ブラスター3!全力!全開!」

フェイト「オーバードライブ、真・ソニックフォーム」

まどか「あなた達も・・・ねっ?」





家康「淡く微笑め！東の将！」

政宗「癖になるなよ？」

幸村「廻れ 焰！螺旋の如く！！」

円堂・豪炎寺・吹雪「イナズマ！ブレイクー！！！」

そして襲い掛る超過剰火力攻撃の弾幕。

シャルロツテ（もう駄目だ・・・おしまいだあ・・・）

マミ「だからあなた達、わたしを助け」

・・・・・・・・・チュ  
（。・じ）ド ン・

そして流れるドリフの音楽と惑星衝突の映像。

作者「いや〜定番だね、マミさんを助けに介入して人類滅亡。結局、マミさんって

こうなる運命」

マミ「と思っていたのか？」

・・・・・・・・・（？>??） ??? ????  
!!--!--!（。ロ。ノ）ノ・・・・・・  
■■■■ヒイヒイ

た##  
##  
##

###この作者はティロ・フィナーレされまし

（\*）・ワ・（\*）  
（\*）<また見てね ヴィヴィオと約束だよ  
）？

さやか of 鬱ルートにとある奴らが介入したようです。

ここは学園都市の次に出来た見滝原学園都市。

その街中を1人の学ラン姿の少年がひたすら走っていた。彼はこの見滝原にいる友人の救援の電話から助けるためにこの街まで学園都市を抜けてやってきた。

まどかからの連絡を受けた『上条 当麻』は急いで『上条 恭介』を探していた。

当麻「あいつならまださやかに声が届くかもしれない・・・!どこいったんだ!」

それというのも友人の『美樹 さやか』が魔女化してしまい、まどかと杏子が今、止めに入っているのだが声が届かず、彼に連絡がどうにかつなぐたのだが他にさやかに声を届かせる事が出来るとすればもう恭介くらいしか思い浮かばなかった。

当麻「恭介!」

恭介「当麻?どうしたの、そんなに慌てて」

当麻「さやかが・・・さやかの奴が大変なんだ。詳しい事は言えないがお前の力が必要

なんだよ、頼む、一緒に来てくれ・・・!」

恭介「でもこれから大事なコンクールが・・・夢を叶えるチャンスなんだ」

当麻「んな事言ってる場合かよ！？さやかの奴が危ないんだぞ！」

恭介「だったらさやかはどうなってるんだ？何で危ない理由を言わないのさ、当麻」

当麻「それは・・・」

一般人の彼にさやかは魔法少女でその代償として魔女化の危険性があり、今まさにその魔女にさやかがなってしまったなど言っても信じて貰えると思えない。

恭介「悪いけど悪戯ならやめてくれ。君と違って僕には叶えたい夢があるんだ」

一步通行「夢ね〜？それがお前が自分でとった夢ならカッコいい台詞だがよ〜？」

そこに現れたのは白い短髪と赤い瞳に中性的な体格。白とグレーの縞柄の長袖Tシャツ、首に黒いチョーカー、ロフトストランドクラッチ式の現代的なデザインの杖をついている少年、彼がこの学園都市最強のLEVEL5『アクセラレーター一方通行』だ。

一方通行「おい、上条 当麻。右手、貸せ」

当麻「お、おい。一体、何を」

当麻の右手を掴んでそれを恭介の手に触れさせると当麻の能力『幻想殺し』<sup>ジンブレイカー</sup>が発動する。

恭介「えっ・・・何で、何で指が・・・力が入らない」

持っていたカバンが手から落ちてその場に崩れ落ちる恭介。事故で動かなくなった自分の指は奇跡的に回復した、辛い時期を耐えた結果だと医者から言われてまたヴァイオリンを演奏できることに喜んだがその指がまた動かなくなってしまった。

当麻「これは・・・？」

一方通行「こいつの指が動いたのは美樹 さやかとか言うのが契約でこいつの指を動

かせるようにする願いを魔術でかけたからだ。要するに  
お前の右手の能力

で触れりゃ、その願いの魔術っていう幻想も殺されんの  
さ

恭介「さやかか・・・？願いの魔術・・・？何をいつて・・・」

そんな恭介の髪を掴んで顔を上げさせ、猟奇的な笑みを浮かべながら真相を告げる。

一方通行「まさか、お前。指が治ったのが自分の頑張りだとか奇跡だとかそんなご都

合主義満載で考えてたんじゃねえよな？そう思ってるなら本当の事、教

えてやるよ、お前の指が治ったのは美樹 さやかが化物になる代わりにお

前の指を治すって魔術に手出したからだ。お前は何もしてねえんだよ」

恭介「何を言ってるんだ、魔術とか、そんな非科学的なモノが」

一方通行「そっぴや、こつちの学園都市は能力者の知識が無かったな・・・」

すると一方通行が首のチョーカーの電極のスイッチを入れると起動音と共に足を少し上げてその場で地面を足で踏み付けると大きな地割れが起きてそれに恭介も巻き込まれて、というより余波で裏に吹き飛ばされたという感じだ。

一方通行「これが現実だ、お前の知ってる世界の狭さが分ったかよ？」

恭介「ひっ・・・ひいつ!？」

一方通行「お前のお友達的美樹 さやかもおんなじ化物になったんだぜ？お前みた

いなお気楽能天気なお坊ちゃんのために人捨ててまで化物になりたがるな

んざ、人生をドブに捨ててしまったようなもんだ。くだらねえったらないぜ」

そういつて近づいてくる一方通行から逃げようとする恭介を当麻が立ちふさがる。

当麻「早く行ってやれ、さやかのもとに！あいつを助けられるのはお前なんだ！」

恭介「僕にどうしろっていうんだ、怪物なんて何も力のない僕にどうもできないだろ！？」

当麻「っ！！馬鹿野郎！！！」

強烈な右ストレートで恭介を殴り飛ばした当麻は胸倉をつかんで思いの丈をぶちまける。

当麻「あいつは自暴自棄になってたお前をずっと支えて言葉を掛けてずっと優しく

さを向けてくれたんじゃないか・・・！お前に拒絶されても何度も、何度もお

前のために何があっても側にいてくれたんじゃないかよ！」

前に病室に行ったとき、自分で自傷行動をしそうになる彼を必死に止めているさやか

を見た事がある。それでもずっと必死に支え続けた彼女も知っている。

当麻「辛かったはずだ、苦しかったはずだ、痛かったはずだ、怖かったはずだ、震え

たはずだ、叫んだはずだ、涙がでたはずだ・・・！」

今更ながら思い出す。自分が荒れていた時の事を、さっきまで自分



の指も完治して夢  
に手が届きそうな嬉しさでそんな事は全く記憶から無くなっていた  
のだが。

当麻「お前はそんなあいつの心の闇に気付けなかったのか？一番近  
くにいてやったは

ずなのに何も分かんなかったのかよ!!」

泣いていた、自分を止めるために泣きながら必死で自分を押さえつ  
けていた。

美琴「つつか、あんたは何こんなところで油売ってるのよ」

当麻「御坂!」

現れたのは学園都市のLEVEL5の1人『超電磁砲』・御坂 美  
琴である。スタス

タと歩いてきた美琴は恭介の胸倉をつかんで立たせると頭を振り被  
つて思いつきり強  
烈な放電つき頭突きをおみまいする。

恭介「い・・・痛い・・・!?!」

美琴「さやかはそれ以上に痛がってたのよ。ちっとは反省しなさい、  
この大馬鹿野郎!」

冥土帰し「これこれ、治療する前にしなせちや、さすがにわたしで  
も治せんよ?」

現れたのは学園都市の名医で本名は不明だが死んでいなければあら

ゆる怪我・病気も

治療できる天才医師・『冥土帰し』だった。

マミ「先生、その子の治療をお願いします。色々と許せない部分も  
ありますがもう一

度だけチャンスをおあげてください」

冥土帰し「はい、わかった」

一方通行「チツ、余計な事してんじゃねえよ、マミ」

マミ「あら、あなたなら執行猶予抜きで即死刑にしてると思ったの  
にやっていないだ

け、救いはあるという事だと思っただけれど?」

マミは以前に一方通行に魔女との戦いで助けられ、何度か共闘して  
いるうちに一応は

彼女も信頼はするようになったようでそれなりに打ち解けている。

当麻「さやかは俺が助け出す。お前は・・・そこで何もしないで泣  
いてろ、お前がそ

んな馬鹿だとは思わなかったぞ・・・!」

そういつて駆け出す当麻。

美琴「ちょっと待ちなさいよ!わたしも行くわ!」

マミ「わたしも行くわ、あなたも着てちょうだい、一方通行」

一方通行「チツ、面倒くせえな・・・。つつか俺に命令すんな、三



アを吹き飛ばして

地面に撃墜すると落ちてきたまどかはほむらがキャッチし、杏子はマミがりボンで身体を蒔いてそのまま引き寄せて地面に着地する。

ほむら「何故、あなたまでここに来ているの、上条 当麻」

当麻「さやかを助けに来たに決まってるだろ、わかりきった事言うんじゃないわ」

だがそんな当麻に表情も変えずにほむらは宣告する。

ほむら「無駄よ、魔女化した魔法少女は元には戻らない。倒す以外道はないわ」

しかし当麻はそんなほむらの言葉すら一喝する。

当麻「ゴチャゴチャうるせえよ。俺はあいつを助けるためにここに立ってたんだ、そんなのがお前のいう世界の理だつてんなら……」

オクタヴィアに相對した当麻が右手に力を込める。

当麻「まずはそのふざけた幻想を……ブチ殺す!!!」

マミ「援護するわ、上条さん」

美琴「今日は助けてやるから後で借り返しなさいよ!」

戦闘体勢をとる当麻達。そして上階では彼女達を魔法少女にし、エ

ネルギーを摂取する役目をしているインキュベーター・通称キュウベえが見下ろしている。

キュウベえ「まったく人間のやる事は理解に苦しむね。なんでわざわざ無駄だと分か

っている事をやりたがるのか、わけがわからないよ」

一方通行「だろうな」

刹那、キュウベえの足元の地面が何かに打ち上げられたかのように吹き飛んで彼自体も壁に叩き付けられどうにか立ち上がり、見るとそこには一方通行がいた。

キュウベえ「何故、君まで？君ほどこれがどれほど無駄なのか、理解出来るはずだよ

？人間は有害しか生まない、それが宇宙のために有効に活用されるんだ

この意味を理解出来るだろ、一方通・・・うぐっ」

一方通行「確かに俺達人間はどうしようもねえだろうな。同じ事繰り返してばっかで

お前の言うとおり有害なのかもなあ・・・だがな」

そういつて掴む手に力を込める。その時、キュウベえは自分の中に別の存在がアクセスする感覚に襲われた。全てを繋ぐ、自分や別の個体、自分達を送り込んだ存在との

回路にアクセスし、解析されている。それは一方通行だった。

一方通行「今の俺の演算能力ならてめえのネットワークに介入しててめえらを全て削

除する事も出来る。お前らは一つのネットワークで繋がってる、いわゆる

プログラムだ。そこにウイルスを流し込まれれば・・・  
なあ〜？」

猟奇的な笑みを浮べた一方通行が手に力を込めてその粒子加速装置の如き演算・解析能力によって彼と連結するすべてのネットワークの解析を完了させた。

キユウベえ「そんな・・・人間にこんな事出来るわけがない」

一方通行「俺達がどんなにクズでも、どんな御託を並べても、あのガキが死んでいい

事にはならねえだろうが！！ああんっ！？」

そして握り潰すと同時に排除が実行されて彼の手にいたキユウベえそして他の全ての個体に加えてそれらを送っていた存在すら一方通行の強制処理の前に消滅した。

一方通行「ちっ、つまんねえ・・・興ざめだ」

見下ろす当麻達を見て面倒そうな溜息を吐くとそのまま地面を蹴って下へ降りる。

・  
・



む！最高のハツピ

ーエンドって奴を！お前はその手でたった1人の大事な親友を護ってみせるっ

て誓ったんじゃねえのか!？」

その時、地面の崩れた部分に足を取られて当麻がよろけたところに攻撃が飛ぶ。

マミ「しまっ……!」

美琴「当麻ー!ー!」

杏子「させるかっての!ー!」

しかしその攻撃をすんでのところ杏子が攻撃を防ぎ切った。

杏子「たくっ……てめえのいう事は夢過ぎんだよ……思わずすがりたくなるぜ」

当麻「夢でもねえ！手を伸ばせば諦めなければ届くんだ、お前もほむらもそれはま

だ全然終わってもいない、始まってもないねえ!」

また走り出した当麻を今度は杏子も加わって彼の進む道を切り開く。

当麻「ちよっとくらい長いプロローグで……絶望してんじゃねえよ!ー!ー!」

美琴「磁場で足場を形成すれば……!ー!」





しかし身体を何かに掴まれて見てみると黒い手のようなものが自分の身体にまとわりついてさらにソウルジェムに触れると激痛が走る。

「ニガサナイ、ニガサナイ、ニガサナイ、オマエニアルノハゼツボウ、ゼツボウ」

さやか「やだ．．やだ？！助けて、誰か助けて！？」

当麻「だったら初めから仲間を頼れよな！！」

さやか「えっ？」

触れていた黒い手に誰か別の手が触れた瞬間、それらすべてが打ち消されて周りが光に包まれてやっと目の前にいた人物が親友の『上条 当麻』だというのが分った。

さやか「当麻さん．．．！なんでここに．．．？わたしは一体．．．」

当麻「お前は魔女になっただよ、だけど安心しろ。俺や皆が助けに来たんだ」

そついつて光を指差す当麻の先を見るとそこには自分達を見上げて必死に声をあげている、マミ、まどか、美琴、杏子の姿だった。

さやか「でも．．わたし、分からないよ。この世界は護る意味があ

るのかって・・・

わたしが戦う理由ってなんなのか・・・」

当麻「バカ野郎！お前、言っただんだけ。この力で誰かの幸せを護れるって、だった

ら護ってやれよ。お前の事を仲間だって、親友だって言ってくれる奴らを」

さやか「当麻さん・・・仲間・・・親友・・・」

視線の先には呼びかけ続けてくれているまどかや美琴達。

当麻「それにお前みたいな可愛い奴を泣かせた優柔不断な恭介の奴にも一発、特別

に痛い一発ぶち込んで説教してやれ！逃げてばっかじゃねえか、今のお前は」

そういつてさやかか黒く染まっていたソウルジェムに触れるとその穢れは一瞬にして

消え去り、元の彼女本来の綺麗な蒼へと戻った。

手を差出す当麻の言葉と勇壮な笑みに今まで沈み切っていた心に火が灯る。

そうだ、自分にはあんなに大切な親友や仲間がいたんだと。それを自分の葛藤からこんな事になって傷ついた仲間達が自分の帰りを待っている。

さやか「まだ大丈夫かな、わたし・・・ここから始められるかな、当麻さん？」

当麻「へっ、勿論！さあ、いい加減始めようぜ。一緒にあいつらを

護りに、さやか！」

その手を笑顔でとって立ち上がるさやか。その姿が元の魔法少女へと戻る。

さやか「はい！」

だがそんな2人の前にさっきの黒い手が無数に立塞がった。しかし2人は駆け出して

当麻は幻想殺しでさやかは剣で次々に薙ぎ払って光の先を目指す。

さやか「くっ！？数が多い！」

当麻「ちくしょう！」

しかしその時不思議な事が起こった。周りの黒い手が何故か動きが止り、さらには空間

自体も白黒のように見えているからだがさやかには覚えがあった。

さやか「これってほむらの時間停止能力？」

ほむら「「明察」

現れたのはほむらでどうやら2人を助けに来たようだった。

当麻「どうい風吹き回しだ」

ほむら「勘違いしないで。ただかけてみたくなったのよ、あなたの言う幻想に」

そういつほむらに当麻が笑みを浮べてこう言い返した。

当麻「なら教えてやる、その幻想はそう簡単に壊れはしないってことを！」

ほむら「期待してるわよ、当麻」

さやか「本当に生意気よね、あんたって」

憎まれ口をたたきながらも停止した空間を突き進んで3人はまどか達の元に舞い戻った。

まどか「さやかちゃん……、さやかちゃああああん!!?」  
泣

戻ってきたさやかに飛びついて大泣きするまどかを優しく抱擁するさやか。

さやか「ごめん……ごめんね、酷い事しちゃったよね……。ありがとう、まどか」

杏子「たくっ……おせえんだよ。バカ野郎……」

マミ「まったく手間をかけさせる後輩ね」

再会を喜ぶ面々だったがここで美琴が声を上げる。

美琴「まだ終わってないわよ！あいつ、さやかが抜けてもまだ動いてる！」

ほむら「恐らく当麻の幻想殺しは美樹 さやかと魔法の繋がりを殺したんだわ。だから

魔法の人格だけがあっちに具現化しているのよ」

さやか「なら決着をつけるまで！」

そういつて剣を構えるさやかだがさらに杏子やマミ、当麻達も横に並ぶ。

当麻「言つたら、俺達も仲間だ。一緒に戦うぜ」

美琴「わたしも協力する。いくわよ、さやか」

さやか「うん！」

とそんな感動的な場面にあのお方がぶち壊しにやってきたようです。次の瞬間、オクタヴィアの足場が大きく吹き飛ばされて上に打ち上がり、さらに巨大な瓦礫が直撃して地面にめり込んでしまったのである。

杏子「な・・・なんだ？」

マミ「この無茶苦茶な攻撃を出来るのは、彼しかないわね・・・」  
そうあのお方である。

一方通行「つつかよお、折角無理して出てきたって言うのによ。  
なんだあ〜?こ

の馬鹿みたいな三下は？」



えて元の現実世界  
へと全員が戻ってきた。

一方通行「俺を誰だと思ってるんだ、学園都市最強のLEVEL5。  
一方通行だぜ？」

そういつて高笑いを浮べる非常識な強さの一方通行を呆れ顔で見つめる面々。

当麻「相変わらず無茶苦茶な奴・・・」

まどか「当麻さん・・・本当にあの人に勝てたんですか・・・？騙し討ちじゃなくて？」

当麻「まどかさん、それはちょっと酷いですのことよ!？」

そんな勇壮な戦いを見せていたはずの当麻のいつもの姿に全員笑っていた。

・  
・  
・  
・

美琴「ええっ!?!あの優柔不断男をぶん殴ってフツてきた!？」

さやか「はい さっき病室いってちっとはビシッとして男らしくなれ!って」

数日後にまた会ったさやかは美琴が驚くような大胆行動で恭介をフツていた。





さらに抱き着く力を強めるさやか。案外、スタイルがいいので腕に押し付けられる感触

に悶絶する当麻と怒りのあまりにある意味魔女化している美琴。

美琴「あんたは恩を仇で返すなんていい度胸じゃない・まとめてビリビリいわしたる！」

間髪いれずに雷撃をぶつ放すが当麻がそれを無効化してさやかをぶら下げたまま逃走する。

美琴「さて、こらああああ!!!!」

さやか「待つてくださいよ〜!当麻さん」

そしてそんなコメディ風景を見つめるまどか、マミ、ほむら、そして見滝原中学の制服を着ている杏子。

マミのススメもあって彼女も今日から見滝原中学へと入学する事にあつた。

勿論、制服やカバンなどは密かにバイトでためていたお金を使ってである。

マミ「当麻さんもあれね、フラグ建築士ね、しかも国家資格級の」

まどか「フ、フラグですか？」

ほむら「でもあれはあれで女の敵になりそうな気がするけど」

杏子「あれか、今はやりのラッキースケベってやつか」

好き放題言われまくっている当麻は例の如くあの言葉を叫ぶのであった。

当麻「だああああああ！！？不幸~~~~~だあああ~~~~~！  
「！！」

〜TOB

e Continued?〜

さやかのお鬱ルートにとある奴らが介入したようです。(後書き)

ご意見・ご感想お待ちしております。

第1回vsティータイム♪music&battle carnival♪

暗闇のスタジオに律のスタートの合図が響く。

♪オープニング♪

律「1、2、3、4！1、2、3！」

-スタジオライトアップ

OP曲『Cagayake!GIRLS』

-ラスサビ前-

紬「U、唯！」

唯「梓！」

梓「澪！」

澪「りーっ！」

律「ムーギ！」

唯・律・澪・紬・梓「けいすけ！」

OP曲『Cagayake!GIRLS』

♪OP終了♪

圭輔「はい、始めました。vs・ティータイム！司会はわたし遠藤 圭輔でお送り

しま〜す！」

観客「イエー……イー！」

圭輔「この番組は番組チームのHTTのメンバーと毎回、ゲストをお迎えして各ゲー

ムで対戦し、優勝を目指すと言う番組です。もちろんバトルもあり、また我々

軽音部とゲストのコラボレーションライブも存分にお楽しみくださいーい！」

律「ちょっと待て〜い！」

番組進行をする圭輔を止める律。

圭輔「何、どうしんだよ？」

律「何でお前だけが司会やってわたしらだけがバトルするんだよ、お前もやれー！」

圭輔「んじゃ、聞くが俺らの中でまともに司会進行が出来る奴がいれば言ってみろ」

律「……」

まず唯にやらせたら進まない事確定、紬の場合はのんびりしすぎて尺に収まらない可能

性があり、律は唯と同様、漣は恥ずかしがってまず出来そうにない

し、梓は出来るだろうがゲスト達から上手く話を聞きだして面白く回すにはお堅い感じである。

主輔「それではまず本日の対戦相手、こちらの方達です！どうぞ〜」

手を向けた入り口に白いスモッグが噴き出してそこから対戦相手のチームが走ってくる。

主輔「本日の対戦相手、学生出演梓に見事入りました。初音島・風見学園からの出場、

チーム・D・C?の皆さんです！」

義之・音姫・ななか・茜・渉・まゆき「どうも〜!!」

主輔「それでは1人ずつ、自己紹介をお願いします。メモだと渉さんは割愛で」

渉「酷い?!」

義之「え〜と風見学園本校1年の『桜内 義之』です」

音姫「風見学園本校3年、『朝倉 音姫』です。みなさん、よろしく」

ななか「白河 ななかです！ななかって呼んでね〜?」

茜「風見学園本校1年の『花咲 茜』です みなさん、よろしく〜！（チユツ）」

まゆき「本校3年の『高坂 まゆき』よ。今日は負けないんだから〜!」

渉「本校1」

圭輔「はい、ありがとうございました〜」

渉「orz」

すでに今日の扱いを悟った渉はその場に両手をついて頂垂れるしかなかった。

漣「何か他のアニメのキャラと共演って不思議な感じするな〜」

律「つうか、茜さん・・・すげえ・・・」

茜「うふふん〜 胸なら負けてないよお〜?」

唯「漣ちゃんのアドバンテージが負けた・・・!」

漣「おい!?!」

梓「いいなあ・・・」

紬「まだまだおつきくなるわよ、梓ちゃん(汗)」

なんだか話がカオスな事になってきたので圭輔が話を強制的にぶつた切った。





茜「ふえ〜・・・確かに前、白河さん家のアルバムにあった昔のことりさんだ〜」

音姫「ど、どうなってるの?」

圭輔「みなさん、これがテレビの力です(キリッ)」

何とも悪役っぽい不敵な笑みを浮かべながら司会進行を続ける。

唯「テ、テレビって凄い〜」

梓「作者さんも随分と無茶をしちゃってますね・・・」

紬「あははっ・・・(汗)」

そして早速、第一ゲームに入った。

圭輔「それでは最初のゲームは『ピンボールライナ』————!!!」

観客「イエー イ!!!!!!」

ピンクと白のストライプでカラーリングされた巨大ピンボール台と下にはベルトコンベアが設置されており、各チームの代表1名に頭上にカゴを設置された。

圭輔「このゲームはランナーは動くベルトコンベア上を走りながらボールを頭上に設

置したカゴでキャッチし、司令はそのキャッチする人間にボ

ールが落ちてくる

場所を指示をしていただきます」

そしてD・C？チームからは渉、H・Tチームからは律が出る事になった。

主輔「そしてボール1個は10ポイントですが途中で落ちてくるピンクボールはポイント

ントは30となっております。そしてボールを2個取ることにベルトコンベ

アのスピードがどんどん上がって行きますので頑張ってください」

そしてまずはD・C？チームからの先行となった。ランナーは渉、指令台には茜に義

之、音姫の3人でななかとまゆきの2人は応援席での観戦となった。

主輔「さあ、指令台の音姫さん、自信の方は？それと何か作戦はありますか」

音姫「えっと普通のは弟さんと花咲さんが指示してピンクをわたしが言う作戦です」

ななか「渉くん〜！がんばって〜！」

まゆき「板橋〜！失敗したら・・・又ツッコすからね？」

渉「さ、イエッサー！！サーー！！！」

勝たないと命はないと言うことらしく不適な笑みを浮かべていた。

圭輔「さあ、渉さんの生死のかかったピンボールランナー、スター  
ト……！」

そしてゆっくりとベルトコンベアが動き出す。最初はまだウォーキングレベルだがボールを2つゲットしてちょっとコンベアの速度が上昇したのか、小走りになった。

義之「1！1！」

渉「お、おう！」

ななか「4 / 4 / 4 / 4！」

渉「しゃあああ……！」

義之・ななか「3！3！3！」 「7 / 7 / 7！」

渉「どつちだよ!?!？」

このゲームは指示側が合わせないと指示がバラバラになってランナーは混乱するのだ。  
そして2番の方からピンクボールが落ちてきて大体の場所を予測した音姫が叫ぶ。

音姫「板橋君……4番……！」

渉「はい……！」

しかし、何故かその場で直立不動で姿勢を正してしまう渉。普段から音姫などに叫ばれるのは何かをやらかした時に追われている時なのでその癖でついつい止まってしまったのだがもちろんピンクボールは落下した。揚句には慌てて動き出したのをベルトコンベアに足を取られて前のめりにズッコケてボールを全部ぶちまけた上にそのままコンベアに流されてステージから落ちた。

主輔「え・・え〜、というわけでこのゲームはHTT100ポイント、D・C?チームは

0ポイントでHTTチームの勝ち〜!」

HTTチームの方はことりの的確な指示があつて律も息を上がらせながらどうにかポイントを獲得して多少のアドバンテージを得る事が出来た。

主輔「続いているゲームは懐かしのこの企画、『ウォールクラッシュ』  
~~~~~!」

観客「イエー イー!」

主輔「こちらはあの東京フレッドパーク関係者の協力の元復元させました名物ゲーム

でルールはマジックテープの特製ジャンプスーツを着て、トランポリンを使っ

て壁にジャンプして両手の高さで得点が決まります。クリアゾーンに片手でも

届けば今回は150p獲得。真ん中のNGゾーンに手が入

「つたら得点はゼロです」

まゆき「うひょ～～～ これテレビで見て一回はやってみたかったのよね～！」

テレビでよく見た事のあるセットに燃えてきているまゆき。

主輔「また今回は代表者3名で飛んでもらい、その合計点がそのままポイントとなります」

HTTチームはことり、漣、唯。D・C?チームは義之、茜、まゆきの3人になった。

主輔「それではまずはデモンストレーションとしてフランキー為谷さん、どうぞ～！」

漣「そこだけリアルなのか?！」

為谷「くぁwせdrftgyふじこーp&#??;:;\$      ? ? !  
!?!?!?」

主輔「(ピー!ピピっ!!)はい、さっさと飛んで」

お決まりのパターンが決まったところでフランキー為谷が勢いよくトランポリンでとんだ。

為谷「D・C?おめでとじいぢいまああああしよい!!--」

一発でclear!ゾーンに手をつけて「ドヤッ顔」で決めたフランキー為谷だった。

主輔「各チーム1人ずつの挑戦です。まずはD・C？チームは誰が？」

義之「よしっ、まずは俺がいつてくる！」

観客「イエエーイー！」

音姫「弟くん、がんばって〜！」

主輔「それでは桜内 義之、飛びます！（ピー！）」

勢いよく飛び出してトランポリンで跳躍する義之だったが微妙に距離が伸びなかった。

主輔「40、40で80点〜〜！」

ことり「それじゃ、今度はわたしがいきますね？」

主輔「HTTチームは白河 ことり〜〜〜！」

動きやすいようにいつもロングにしている髪をポニーテールにまとめて手を上げる。

そして緩やかな助走から加速して飛ぶ際にトランポリンのど真ん中に着地し、さらに足も伸ばした状態でその力のまま上に飛上った。

ことり「元祖D・Cヒロイン、なめたらダメッスよ！」

梓・紬「ことり先輩、ファイト〜！」

さらに壁を駆け上がる様に壁を蹴ってそのまま左手がclear！  
ゾーン、右手が4  
0ポイントゾーンに支えとして張り付いていた。

主輔「clearで150と40で190点〜〜！」

ことり「イエイ なんちゃって）照」

主輔「解説の杉並さん、まさかの義之選手の負けとなりましたがどうでしょう？」

杉並「トランポリンは飛ぶ場所を間違えると反発力を生かしきれない。その差が同志

朝倉とことり嬢の差を分けたとみられる」

観客「イエエーーーーーイ！！！」

まゆき「ぐぬぬっ・・・！80対290、ここで得点一気につめてやるんだから！」

スポーツ万能なまゆきの活躍に期待がかかる。

主輔「（ピッ！）」

まゆき「全国2位なめんなーーーーー！！！」

今度はまゆきが両手clear！ゾーンというさすがの離れ業を見せつける。



主輔「両手clear！ゾーン、150、150で300点〜〜  
！」

義之「さすがまゆき先輩！これで380対290になったぞ」

そして次の対戦は茜vs唯となった。

杉並「これは・・・圧倒的戦力差ではないか・・・」

主輔「解説の杉並さん、茜選手はそんなに運動神経がいいんですか？」

杉並「いや、運動的な意味ではない。だが圧倒的戦力差だ、胸囲的な意味で」

そして観客の全員が2人の胸に注目する。

茜「うふっくん」（ドドドーン）

唯「……………」（ストン）

そして流れる沈黙。

唯「絶対に勝つてやるもん！！！！」（泣）

涙を流しながら必勝宣言する唯だったが勝負は思いもよらない展開となった。

何と唯が気迫の30、30で60点を取り、茜はここでそのスタイルが仇となった。

茜「そりゃ〜!!えっ、きゃああ!?!」

飛びついたまでは良かったのだが手を前にして先につかせなければならぬところを

胸からいつてしまったのでそのまま反動で落下してしまっただけ。とりあえずその場でジャンプして10、10の20点だけ獲得した。

主輔「解説の杉並さん、圧倒的戦力差が仇になってしまったようですが」

杉並「逆に唯嬢の圧倒的戦力差のマイナスがこの競技では最大の武器になったようだ」

唯「何だが、納得できないよ……」

律・梓「唯先輩……(泣)」

これによりHTTチーム350点とD・C?チームは400点となった。

主輔「続いての挑戦は秋山 澪〜!」

観客「イエエー……イ!」

澪「よ、よし、頑張るぞ!」

ことり「澪さん、澪さん」

そういつて呼ばれた澪に裏を向かせると両肩を持ってマッサージ的な事をし出した。

ことり「緊張、とんでけ！」

何故か、膝がつくん。

漣「こ、ことりさん?!何するんだ?。」

ことり「ふふっ、さっきより緊張がとれた顔してますよ、漣さん」

なんだか騒いだら緊張感が抜けたのか妙に身体も軽くなった気がする。

漣「いきます！」

主輔「(ピッ!)」

そしてゆっくりとした助走から一気に加速してトランポリンの中心をしっかり捉える。

漣「はい！」

綺麗な跳躍から飛び上がってしっかりと貼りつき、30、40の高得点を取った。

主輔「ここでHTTチームが逆転、ですがまだまだ再逆転も十分可能です!さて次の

ゲームは『キッキングスナイパー』!」

3人分の足場ステージに目の間にはベルトコンベアが置かれているセットが出てくる。

主輔「ルールはベルトコンベアーに乗って流れてくるターゲット（缶）をプレーヤー

がボールを蹴って倒すゲームで1ゲームにつき、5パターンのターゲットが流れ

てまいります。プレイヤーが1パターン内に使用できるボールは1球です。

チーム毎に先攻後攻でプレイを行い、その際出てくるターゲットは同じもの各

缶タワーの中にある赤い缶を倒せば20ポイント獲得全ての缶を倒すと50ポイン

トのボーナスが加算されるルールとなっています、頑張ってくださいーい！」

このゲームにはHTTから梓、紬、ことりがD・C?チームからは涉、音姫、ななか

が出場して以外にもここで涉が活躍して230ポイントさらには日頃から強運が強い

紬が何度も不安定な缶の足場にボールが当たって高得点を連発し、200ポイントを

獲得した事でHTTチームが620点、そしてD・C?チームが630点と逆転する。

次のゲームは『ジャングルビンゴ』。3人同時に縦5マス×横5マス×奥行き5マス全面

アクリル高さ6mの超巨大立体迷路を頂上目指して登っていき天面は25マスのビンゴ

になっており、1人1マスずつ開けて行く。1人が天面を1枚開けたら、下で待機して

いる仲間がスタート出来る。制限時間3分で1つマスを開ければ1



そして演奏者が覚えた通りに光ったパッドを叩いて主旋律を演奏する。光に合わせ  
てパッドをタイミング良く叩けば音が鳴るが、光っていない・叩く  
タイミングが合  
っていないと音は鳴らない。主旋律を聴いた解答者が曲名を当てる  
が、曲名が出て  
来ない場合は主旋律を歌う、番組などのタイトルを答え、合ってい  
れば正解として  
認められる。解答権は4回あり、1回目の正解で40点、2回目  
で30点、以下20点、  
10点と得点が下がっていく。また解答権を放棄する事で曲を覚え  
直す事も出来る。

さすがにこれは軽音部メンバーに部があり、100対60と差が  
つく結果になる。

主輔「さあ、それでは最後のゲームは『バウンドホッケー』!!」

チーム代表6名が1つのパックをリレーでつなぎゴールに入れる  
ゲーム。プレイヤー

は、フリッパを巧みに使い次のプレイヤーにうまくパックをリ  
レーでまわし、最

後6人目のプレイヤーはタイミングよくゴールに入れるゲーム。

途中パックが溝に落ちてしまう、もしくはゴールに入れるとまた  
新しいパックが出

てゴールに入ると50ポイント獲得、ゴールを外しても10ポ  
イントゾーンに入ればポ

イント加算される。ブルーパックをゴールに入れるとポイントが  
2倍で加算される。

ゲーム内でブルーパックは3回流れてくるのでそれを決めるのが重

要である。

観客「イエエエエエー……イ……イ……」

そしてついに最終ゲームとなりHTTチーム1100ポイント、対してD・C?チ

ームは1060ポイントとかなりの接戦で迎える事になった。

主輔「まずはD・C?チームからの挑戦です」

義之「よっし、ここで大逆転勝利だ!」

涉「よっしゃ〜!いけ、義之〜!!」

まゆき「あんたもやんのよ、板橋!」

音姫「がんばりましょう、皆」

ななか「やるぞ〜!」

それぞれの位置についてゲームがスタートする。タイミングよくフリッパードパスを

回していきながらアンカーの義之がゴールを狙ってシュートを打つていく。

ななか「はい、義之くん!」

義之「そらっ!」

まゆき「板橋!」

渉「先輩！」

音姫「花咲さん！」

茜「白河さん！」

なんとか繋ぎに繋いでポイントを重ねてゲームが終了した。

圭輔「D・C？チームの得点は520ポイントで総得点1580ポイントです！」

これによってHTTチームはこの挑戦で480点以上をとらなければならなくなった。

ことり「圭輔くん、圭輔くん」

圭輔「はい？なんですか、ことりさん」

ことり「最後は圭輔くんがこちらのチームで皆でプレイして？」

圭輔「いや、俺は司会の仕事が……」

ことり「やっぱり圭輔くんが揃ったの放課後ティータイムですよ？最後の勝負は全員」

で勝利目指してやるのがいいと思うっスよ？」

観客「ケ〜スケ！ケ〜スケ！ケ〜スケ！ケ〜スケ！」

観客席からも「圭輔コール」が始まってことりが圭輔の背中を押し





そしてパックが出されてそれをタイミングよく、全員声を出して回していく。

唯「あずにゃん！」

梓「漣先輩！」

漣「律！」

律「紬！」

紬「遠藤くん！」

主輔「任せる！」

そして次々にパスを繋いでいき、ポイントを重ねる。だがここでミスがでた。

律「げっ！？」

律が2倍のブルーパットのパスをミスって紬が返せなかったのだ。

主輔「ドンマイ！ドンマイ！次、一番いいパス送れよ、律！」

律「おう！」

漣「次くるよー！」

梓「集中、集中〜！」

唯・紬「うん！」

茜「圭輔くんって本当に向こうのリーダー的な存在なんだね」

ななか「本当にみんなが頼ってるって感じがするよね」

ことり「さあ、このパットをゴールに決めればHTTの逆転勝利、  
どうだ〜〜!？」

そして最後のブルーパットを回して圭輔が撃ちにかかるがタイミン  
グが少しずれたの  
かこのまま打つても10点ゾーンで逆転が出来ない。

だがここで一か八かで圭輔は撃たないで軽く当ててスピードを殺し  
て柔らかく放物線  
を描くような軌道でそのブルーパットは綺麗にゴールへと吸い込ま  
れていった。

ことり「逆転!逆転!HTTチームの逆転勝利〜〜!」

唯・律・紬・漣・梓「やたあああああああああ!?!」

圭輔「どわあああああ?!お前ら、落ち着け . . . どぐつ!?!」

そのまま雪崩式に押し倒されて手荒い祝福を受ける事になった。

. . . .

圭輔「というわけで今回のゲームはHTTチームの勝利〜〜〜!」

「!

観客「いえ~~~~~い!~!~!」

大きな拍手で両者を湛える観客。

主輔「どうでしたか、皆さん。今回は」

義之「負けたのは悔しいけど楽しかったな」

まゆき「でも負けたのは悔し~~~~!」

音姫「まあ、まあ、まゆき。皆が頑張ったじゃない」

涉「筋肉痛だ……」

茜「疲れた~~~~肩こっちゃった」

ななか「2人共、もっとシャキツとしないと(汗)」

お互いに握手をし合うがここからが本番だった。

主輔「それではこれよりHTTとD・C?チームの義之、ななか、  
涉、そしてずっと

観客席で応援してくれていた友達の『月島 小恋』を加えて  
今回限りのスペシ

ヤルライブをお送りしたいと思います!!」

・  
・  
・





第1回 V S ティータイム } music & battle    carnival }

ご意見・ご感想お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3860z/>

---

短編小説集

2011年12月25日01時06分発行